茨城大学教育実践研究 41(2022),35-47

コロナ禍における地域連携 PBL 授業 (2)

― 2 年目の学生評価／インタビュー調査から ―

岩佐淳一*・神田大吾*・鈴木敦*

(2022 年 10 月 21 日受理)

The PBL−Based Projects Seminar in 2021 (2): Its Evaluation by Students

Junichi IWASA, Daigo KANDA, Atsushi SUZUKI*

キーワード:コロナ禍,PBL,プロジェクト演習,インタビュー調査,学生評価

本学人文社会科学部専門科目「プロジェクト演習」は地域の人々との連携のもと地域活動を通して社会人基礎力の養成を目的とする地域連携 PBL 授業である。しかしながら、2020 年度に端を発したコロナ禍によって「地域へ出ていき、地域から学ぶ」という授業の基礎が根底から揺るがされる事態となった。

こうしたなか、2020 年度は地域連携 PBL 授業のメリットとデメリットについて質問紙調査を中心として学生の評価の検証を試みたが、2021 年度は学生に対してオンラインによる座談会形式のインタビュー調査を中心として授業評価を行った。

その結果、2020 年度調査で発見された対面による親密性の高まりが議論の深まり、ひいてはプロジェクト演習の成功と学修成果の手応えに大きく寄与していることを改めて確認できた。このことは PBL 授業における対面の重要性を示唆すると同時に、地域のフィールドに入ることが制限されるなかで、「対面」の効果を最大限に発揮するためには対面授業を授業のどの時期にどのようなかたちで組み込むかという授業の綿密な事前設計と刻々と変わる状況への柔軟な対応が重要であることを示唆していると考えられる。

はじめに

2020 年度のプロジェクト演習は、コロナ禍を受けて「地域に出て行くこともままならない、リモートベースの地域 PBL 授業」となった。担当教員は、これを「緊急時ならではの授業運営上の実験の機会」と捉え直し、地域連携 PBL 授業におけるリモート化のデメリットとメリットについて学生の評価を通して検証することを試み、特にメリット部分に注目して整理した[1)]。

2021 年度も引き続きコロナ禍による大きな制約を受けながらの実施となった。担当教員は、これを「学生、教員、大学はもとより社会全体が一定の経験値を獲得しつつある中で、コロナ禍初年度

* 茨城大学人文社会科学部

との比較検討を行う機会」と捉え、2021 年度末に 2020 年度末と同一内容の調査を行った。具体的には「履修学生全員を対象とした質問紙調査」ならびに「グループインタビュー」の 2 種類である。

しかし、「履修学生全員を対象とした質問紙調査」については所期の回答率を確保することができなかった。2020 年度の調査では全く問題なく回答が得られていたため、虚を突かれたというのが偽らざる実感である。授業がリモートベースとなって以降、学生が「ネット上の文書をダウンロードし、回答もしくは解答を一人で作成し、期限までに再度アップロードする」ことを求められる場面は激増している。これが今回の回答率激減の一因となったとすれば、コロナ禍 2 年目の「経験値獲得」がネガティブに反映された例と考えられる。

一方で、グループインタビューでは予想以上に活発なやり取りがなされており、質問紙調査への反応と好対照を見せた。リモートとはいえ、文字通りグループによる共同作業として実施されたが故に積極性が引き出されたと受け止めることもできよう。

以上を踏まえて、本稿では質問紙調査については分析を断念する。代わって、グループインタビューについて 2020 年度の内容も睨みつつ分析し、コロナ禍における地域連携 PBL 授業について、初年度と 2 年目との対比分析を行うこととする。

（鈴木敦）

1. グループインタビューの分析にもとづく学生の授業評価

本節では学生に対して行った「グループインタビュー」の分析結果から学生が 2021 度のプロジェクト演習をどのように評価したのかについて、学生のナラティブを中心にまとめることを目的とする。2021 年度に成立した学生チームは「令和 in 水戸」チーム 9 名、「さとみ・あい」チーム 6 名、「チームこみフェス」チーム 5 名、計 20 名であった（メンター参加 4 年次生 2 名を除く）。

1-1. グループインタビューの概要

2022 年 2 月にチームごとにオンラインの座談会形式で 1 年間の「活動の振り返り」を行った。振り返りとは活動の反省、活動で得られた外的･内的成果、授業評価、授業に対する不満・要望についての各チームでの話し合いをさす。グループインタビューとは言いながら授業の主担当教員はオンライン上で振り返ってほしい内容の概略は伝えたものの、ミーティングにはほとんど参加せず、傍聴するにとどめた。各チームのリーダーを司会とし、予め伝えた大まかなテーマに沿ってメンバー間で自由に振り返りを行った。3 チームのグループインタビュー時間は「令和 in 水戸」チーム 1 時間、「さとみ・あい」チーム 1 時間 10 分、「チームこみフェス」チーム 1 時間 9 分と各チームで時間量の差異はそれほど大きくはなかった。

このグループインタビューを録音した音声データをテープ起こしし、KH コーダーを用いてデータを量的に把握、KWIC コンコーダンスに表示されるワードを軸に分析を行った。

1-2. グループインタビューから見る学生の授業評価

はじめに学生がグループインタビューにおいてどのような言葉に言及したのかを量的に把握した。

KH コーダーで共起ネットワークを描いてみると学生のグループインタビューは⑴プロジェクト授業で「チーム活動」を行って「自分」がどのように「思った」のか＝学生の学び、⑵オンラインと対面ミーティングに関する感想・意見、⑶コミュニケーションの取り方⑷メンバーとの情報共有、⑸授業の経験に大別できた。⑴⑸については教員の側からプロジェクト演習のグループインタビューを学生に依頼した経緯から当然最も多く言及される項目である。これを実際の出現語数で見ると表 2-1 のようになる。

表 1 グループインタビューにおける出現語

出現語	出現回数	出現語	出現回数
思う	405	ミーティング	30
自分	145	考える	28
授業	122	話す	28
活動	99	楽しい	26
チーム	73	難しい	25
人	62	コミュニケーション	24
演習	45	機会	24
経験	40	勉強	24
良い	40	情報	23
オンライン	37	グループ	22
対面	37	人数	22
履修	31		

＊出現回数 20 回以上。ただし、授業にかかわらないワードは除外した。

1-3. プロジェクト演習という「経験」を履修学生はどのように受け止めたのか

上記対応分析の⑴⑸をあわせて「自分」「授業」「プロジェクト」「経験」というワードを軸とし、「プロジェクト演習」という授業「経験」を履修学生はどのように受け止めたのかについて考察する。

第 1 に本年度の授業「経験」を否定的にとらえた履修学生の評価をグループインタビューから確認することはできなかった。やや期待外れの部分があったことを表明した 1 名を除き、全員が授業経験を大なり小なり肯定的に受け止めていた。このことは授業の様々な学びを「良い」というワードで表現した語りが 41 回検出されたことからも傍証できる。「悪い」というワードは 5 回ほど出てくるが、授業内容についての否定的な評価をともなうものではなく「良いか悪いかはともかく」といった表現であった。

さらに相当数の学生が授業を楽しいと感じていた。このことから、コロナ禍 2 年目の「2021 年度プロジェクト演習」はある程度成功したとみることができる。

⑴　授業は楽しかったのか

「楽しい」というワードはグループインタビューにおいて 26 回確認できた。授業の何が楽しかったのかを記述内容から考察する。

①活動それ自体の楽しさ

細かいディテールで授業の楽しさを表現するのではなく全体としてプロジェクト演習が楽しかったと答えた一群が存在した。

❶１年間、すごい勉強にもなるし、楽しい活動をさせていただいて、本当にいい経験ができました。

❷チーム活動、疑似サークル。この１年を通して、すごい貴重な経験をさせてもらったなと思いますし、私も純粋に楽しかったというのもあります。

❸授業の内容面としましては、皆さん言っていたんですけど、やっぱり楽しかったという一言に尽きるかなと思います。一番最初のミーティングから今に至るまで鮮明に覚えているぐらい楽しかったです。チームで助け合って協力して、何か一つのものをつくり上げたという経験がすごい密にできたので、楽しかったなと思います。

②学習目標の達成感

もともとプロジェクト演習に関心があって、それを体験できたことや学習目的を達成したことに喜びを見出している学生群が存在する。

❶私もやってみて１番に来る感想は楽しかったなというのがあって、この授業をやりたいというのも、茨大を受験した理由の１つだったんですけど、だから本当に参加できて、「さとみ」が第１希望だったので、それもできて、すごく良かったなというのがあります。

❷私も一言で言ったら、楽しかったなというのが感想です。昔から、大学入ったらフィールドワークとか、地域の人と関わるようなことをやってみたいなというのがあったので、それをこの授業で実現することができて、すごいうれしかったです。私も対面で話すのが苦手なんですけど、オンラインになると余計話しにくかったので、ミーティングとかも対面でできたらいいなと思いました。

③コミュニケーション欲求（人に会うことの楽しさ）、コロナ禍でのカタルシス

コロナ禍で入学初年度からオンライン授業を強いられ、他の学生との接触を制限されてきたのが今回の授業の主力２年生である。このようなことからコミュニケーション欲求は上級生よりもより強いものと推察される。以下の記述では「他者に会う」ことの喜びが表現されている。また、楽しさの源泉としてコロナ禍で外出することもできず、他の学生とコミュニケーションがとれない状況がプロジェクト演習で解消されたというある種のカタルシスに通じる開放感を感じた学生も存在す

る。

❶チーム活動、これは最初にも言ったとおり、すごい楽しかったです。メンバーみんな積極的に参加してくれたし、週に１回会うって、すごく私の大学生活の中では、一番会っていたんじゃないかなと思う。こういう意味では、そういう授業があって良かったのかなと思います。

❷外部協力者、水戸市民生活課協働係のお２人さんとは、会うたびに積極的にコミュニケーションが取れて、会うにつれてどんどん楽しくなっていって、今回の最後コミットフェスティバルの２日間でも、かなりイベント内での会話とか、そういうのも積極的にできたりして楽しかったかなと思います。

❸自分としては、この授業はすごい楽しかったの一言だったような内容だったかなと思っていて。1 年間ずっとコロナで苦しみ続けてきて、たいして家からも出ていないし、ずっとパソコン見てたんだけど、この授業を受けてから、毎日が充実したような感じになったので、それはすごいいいことだった。自分としては、すごい充実して楽しかった内容だと思った。

❹振り返ってみるとすごい楽しかったなって思うことがあって。最初とかは、全然まだ１年生のときに、対面をほとんどしていないというのもあって、ほかの学生としゃべる機会をあんまり持っていなかったので、すごい最初は緊張していたんですけど、だんだん週１のミーティングとかをやっていくにつれて、発言しやすくなったり、発言しやすくなったことで、いろいろと活動の幅とかも広がったりして、自分の中ではすごい楽しかったなと思います。

以上のように楽しさの源泉に違いはあるものの履修学生の多くが授業を楽しいと感じていたことが確認できる。特に後 2 者❸❹の楽しさ経験はコロナ禍独特のものと考えることができる。1 年間にわたるオンライン授業、他の学生とのコミュニケーション不足の苦しみやコミュニケーション不全が解消された喜びが率直に表現されている。オンライン授業が大多数を占めたなかで、プロジェクト演習は他の授業にはない対面経験と喜びを学生に提供したと考えられる。

⑵プロジェクト演習を履修した学生はプロジェクト演習をどのように評価したのか

プロジェクト演習を履修した学生は授業を通じて何を学んだと考えているのかについて抽出語リストから探る。学生のグループインタビューを分類した結果、学びは 7 つに分類できた。

①失敗・困難という経験からの学び

3 つのチームすべてが所期の目的を達成したわけではないし、率直に言えば目的を達成できず、またチームの内的統合に欠け、自他ともに失敗と評価されたチームも存在した。また一見目標達成に見えるチームも内部には様々な問題が内包されている。しかし、失敗からの学びも当然ありうる。

❶プロジェクト演習１年間やっての全体的な感想は、結構うまくいくこと、いかないこと、たくさ

んあったけど、これも含めて自分の経験と糧になったのが良かった。

❷コミュニケーション不足で活動が滞ってしまったというデメリットというのもあったんですけど、それも今後の自分の改善点として生かせることができるのかなという点では、やっぱりすごくいい経験だったなと個人的には思いました。

❸大人数だからこそコミュニケーションを取るのが難しかったりとか、解釈違いがみんなで起きてたりとか、あまり今まで意識してこなかったグループワークにおける注意点というのも結構学ぶことができたかなと思います。うまくいかないこととか、大変だなと思ったこともあったんですけど、それも全部すごいいい経験になったし、勉強できたなと思える授業だと思います。

❹今までの大学とか、それ以前の授業とかだったりすると、いわゆるこういう 1 年近くという長い期間、同じメンバーで活動するという授業とか、そういう経験はほとんどなくて、そういう経験ができたのは、一つ個人的にはすごい良い経験になったなという反面、1 年同じメンバーで、チーム 9 人いるというところで、結構他のチームと比べたら人数が多い分、メンバーそれぞれの割り当てとかの融通が利く半面、いろいろ難しい部分もあったなという、それも含めて、人数も多くて期間も長い活動というのをどういうふうにやっていけばいいのかという体験ができたのは、すごい個人の中では大きかったかなと思いました。

❺チーム活動は、今回コロナもあって、うまくいっているような、いっていないようなみたいな、そんな感じもあったんですけど、それも将来に向けての勉強と考えると、成功と失敗とかその繰り返しは、僕たちの中では大きな収穫だったのかなと思います。

②チーム活動による他の学生との協働

大学における授業は基本的にはそれぞれの授業に対して諸個人が向かいあうという形式をとるが、プロジェクト演習はチームで課題を解決するところに特徴がある。これが社会人学習の予行演習であるゆえんである。個人の努力、チームの協働、連携する社会（人）からの助力、3 つどもえで学生の能力の向上を図ることが本授業の特徴である。

❶自分の経験したことがないことを経験することができたとか、同じことに興味を持っている人と一緒に何かアクションを起こすとか、（中略）すごく糧になったかなと思います。

❷こんなふうに 1 年間、同じチームを通して答えがない中で、みんなで意見を出し合って一緒に一つの方向に向かっていくということを多分大学入学してから一度もやっていなかったので、それは他の授業では得られない良い経験ができたなと思いました。

❸1 年間活動してきて、オンラインという形での活動がほとんどだったんですけど、学科とか学年の違う学生の人と一緒にチーム組んで、1 年間という長期的な活動をできたということが今までな

かったので、本当に貴重な経験をすることができたなというのが第１の感想です。

❹チーム活動、疑似サークル。この１年を通して、すごい貴重な経験をさせてもらったなと思いますし、私も純粋に楽しかったというのもあります。自分から集中講義のプロジェクト演習というのを履修すると決めて、ほかの学生がなかなかできないようなことをこうやって１年を通して、グループのみんなと一緒に共有しながらできたというのが、本当にそれこそ自分の糧になったなと思っています。そこではやっぱり積極性だったりとか、コロナでいろいろ制限されちゃったりとか、もちろん前夜祭も中止になってしまったりとか、インターンも、ボランティア活動もできないとか、そういうちょっと難しい状況ではあったんですけど、何ができるのかというのをみんなで考えながら１年過ごしていたというのが、そういうできなかったこともあったと思うんですけど、そういうことよりも、それを踏まえて何をするかとか、そういう収穫が多かったんじゃないかなというふうに思います。

③メンバー内で割り振られた役職を通して醸成された責任感と自主性・主体性

地域の課題に立ち向かう主体性の育成は、近年、地域社会再生の核と位置づけられている [2)]。また社会人としての能力として責任感や自主性は欠かせないものとなっている。プロジェクト演習の目標の１つは活動における責任感、自主性・主体性の育成である。下記のナラティブのうち❶はチームリーダーによるものであるが、❷❸はリーダー以外から出てきた感想である。リーダー、非リーダーにかかわらず責任感や自主性・主体性の醸成がみられたことは今回の授業の大きな成果と考えることができる。

❶自分が履修して良かった点とか勉強になった点というのは、プロジェクト演習、どのチームも、あなたはリーダーで、あなたは副リーダー、あなたは会計みたいな感じで、それぞれ１人１人に必ず役職があって、自分、そういう明確な役職というのをこれまで持った機会というのはほとんどなかったので、そういう自分の役割を１つ持つという、責任じゃないですけど、そういうのを授業の期間内で持って仕事ができたというのは、そういう意味でも、社会人としての責任を現実的に感じれたのはすごい良かった点だと思いました。

❷これは自分で実感したことでもあるんですけど、自分の発言にはプロジェクト演習である以上、責任はあるし、その責任を感じることによって、自分の力でプロジェクト演習を動かせているんだという自信とかにもすごいつながると思うので、この先、社会に出たときに、いい意味で「自分が、自分が」っていけるような力はすごい身につくかなと思います。意見出すにも、何か作業するにも、やっぱり自分が動かさないとじゃないですけど、動かせば、どんどん、どんどんチームとしての活気として身についていくのかなという部分があるので、そこら辺もっと出せてもいいのか、自分もそう思っているんじゃないですがメンバー1 人 1 人が活躍できる場、役職とかもそうですし、そういうのがあったらいいのかなと思いました。

❸自分がすごく成長できたということで、私はもともとみんながやっているのを一歩引いて後ろで

隠れて見ているみたいなことが多かったんですけど、さとみのこのチームが 6 人しかいないという少人数というところの責任感もあって、自分がやりますって、議事録書きますとか、SNS のやつやりますとか、そういうふうに自分から積極的にやりますと言えるようになったのが、すごく成長できたかなと思います。

④大学外の社会と関係づけられることによる学び
本授業は大学外の組織や地域住民と連携しながら社会人基礎力の養成を目的としている。学びとしてのナラティブは内的なものが多いが、大学外部との関わりそのものを学びととらえる学生も存在する。

❶課題提案者の方に課題解決案を提案するという形で、いろいろ高校生のときとかから、いろんな町の問題について改善策みたいなのを考える授業、高校とか大学であったと思うんですけど、そういう授業でやる提案よりも、本当に外部の方と密接に関わっているので、提案とかの現実性とか、そういうのもきちんと考えて立案しないといけないので、そういうところもすごい勉強になったなと思いました。

⑤興味・研究分野の発見、将来とのつながり
　この評価は 2 年生に見られた。まだゼミ所属が決定せず、漠然とした研究の方向性しか持っていない学生がプロジェクト演習を経験することで研究の方向性が明確になったり、大学外の連携組織が一時的な準拠集団となり、そこでの活動がロールモデルを提供することで学生の将来像に影響を与えたことが見てとれる。

❶僕の自分の糧になったと思う点は、自分ごとになっちゃうんですけど、3 年次以降のゼミの活動とかにもつながる、自分の興味のある分野を発見できたというのが、すごい糧になったなと思っていて。今までは、なんとなく地域活性化を勉強したいなぐらいに、ほわーんと考えてたんですけど、この授業を通して、実際に地域と関わって、地域の方の意見とか声を聞いたりしたことで、地域活性化に対する自分の考えというのを自分の声でちゃんと意見とかを話せるようになったことが、すごい経験が生きていて、自分の糧になっているなと感じています。

❷プロジェクト演習の資料で、一番最初に引っかける言葉として、外に出て何か活動してみたいとか、あと、ほかの外部者の方と関わってみたいとか、そういうキャッチコピーはすごく良くて、私もそれにつられて入ったので、あのキャッチコピーはずっとこれからも使えるのかなと思いました。そのキャッチコピーの言葉どおりに、外に出て何か活動したこととか、外部の方と関わったことは、すごく自分の糧になっていて、私は当初、夢もなく、自分が何者になるのかも分からなかったんですけど、このプロジェクト演習をやって、最後にコミットフェスティバルをして、そのときに市民生活課の方やお客さまと会話をして、夢が見えてきたというか、ほっておけないことが出てきたというか、そういうのが出てきたので、未来が見えてくるというか、自分のやりたいことが見えてくることは、すごく自分の糧になったなと思いました。

❸活動が自分の目的や将来とつながっていて、それを体験できた、学習できたことがあげられる。私もやってみて一番に来る感想は、楽しかったなというのがあって、この授業をやりたいというのも、茨大を受験した理由の一つだったんですけど、だから本当に参加できて、さとみが第一希望だったので、それもできて、すごく良かったなというのがあります。

⑥会議や渉外の力量形成

⑥⑦はチーム学習の効果の１つである。大学１年時には簡単なグループ学習を体験するものの、その後の授業のなかで会議の技術や外部との交渉能力を向上させる機会は乏しい。プロジェクト演習はこうした能力を磨く数少ない機会であり、学生の一部はこのことを明確に意識化しているということができる。

❶司会進行をやる機会があって、そういうことから逃げてきたので、今まで。意見をまとめるとか、あと決定する、そういう決断力というものが、いかに難しいかというのを学べたのが良かったことです。あと、渉外も一応やったので、そこら辺が先方とどうやって話すかみたいな、話すときにプロジェクト全体を振り返って、プロジェクトにおいて、先方に伺うことがどういう位置を占めているかというのをちゃんと説明する必要があって、そういうところがすごく新鮮で、多分これからも必要になってくる力だと思ったので、そういうのを考えるいい機会になったと思います。

⑦議事録・活動記録によるパソコン技術やメモ取りなど技術の習得

❶今までパソコンが苦手で、Word、Excel とかも全く使えないみたいな感じだったんですけど、書記の中でやらなきゃいけない議事録だったり、活動記録簿だったりで、ちょこちょこ機械系にも触れる機会が増えてきて、今までできなかったことがどんどんできるようになってきたり、情報収集とかも自分でやって、みんなで話し合ってというのができるので、一人で得られた糧もあるけれども、このチームにいたから得られたこととかたくさんあって、履修して良かったなと思いました。

2. オンラインと対面～コミュニケーションの取り方の難しさ

2-1. オンラインコミュニケーションの難しさ

コロナ禍で対人コミュニケーションが制限される中、オンライン授業の利点、例えば、時間と場所からの解放、オンラインの脱社会的文脈依存性を積極的に評価し、今後の授業のなかに積極的に取り入れようとする議論も活発である。しかしながら、今回のグループインタビューからはオンラインの利点に関する発言は見られなかった。これは２年間に及ぶコロナ禍でのオンライン中心の授業によってオンラインの利点が学生にとって「所与」となったことによるものと考えられる。

特にチーム活動が相対的にうまくいかなかったグループにコミュニケーション上の問題や不満が見られた。以下の学生のナラティブはいずれもチーム運営がうまくいかなかったチームからのもの

であるが、コロナウイルス感染拡大につれて対面での会議ができなくなっていったことによる達成不全感、オンラインでのコミュニケーションの難しさが率直に表明されている。具体的にオンラインコミュニケーションのどのような点が難しいのかについての言及はなされていないが、学生にはオンラインよりも対面が好まれているようである。入学以来、大多数の授業がオンラインで行われてきたことからも学生が「対面」での授業を求めていることは当然の結果ということができる。

❶コロナの状況が厳しくなっていって、プロジェクト演習は他の授業よりも対面で、もしかしたら活動とか外に行って何かすることとかできるのかなとか思ってたんですけど、夏場にかけて感染者とかが増えていったので、対面で会議することも 2 回ぐらいしかなかったし、外に出かけるのも 1 回ぐらいしかできなかったっていうのと。あと、企画立案とかを 1 年間通してやったと思うんですけど、やっぱりコロナ禍での観光ということをやったので、本当に先が見えない中で提案とかを考えていくのとか結構難しいなというのは思ったので、不満ではないですけど、コロナがあったので、自分が思っていたよりかは、あまりアクティブな感じの活動ができなかったのがちょっと残念かなという感じです。

❷この授業の内容としては、最初オンライン授業から始まって、課題提案いただいたときに、私、このプロジェクト演習を受けた理由が、まずちょっと自分のいろんな能力を高めたいなと思って、自己投資的な感じで受けようと思ったんですけど、最初は本当にみんな知らない人だったというのもあって、なかなかオンライン上でコミュニケーション取るのがすごい難しかったというのを覚えています。最初に KJ 法とかやったときに、このままで大丈夫かなってすごい不安があったんですけど、でも、やっぱりオンライのンから対面になって、直接会ってミーティングを一緒にやっていく中で、関係性もどんどん深まっていったんじゃないかなと思います。

❸私もまずはコミュニケーションを取る上で、最初は対面のほうがいいなというのと、あと、プロジェクトを進めるにおいて、グループの人数は 5、6 人が限界かなというふうに思います。5、6 人だと役職の役割がきちんと分散というか、はっきりして、ちゃんと 1 人 1 人責任のある行動ができるんじゃないかなと思うので、なるべくだったらグループの人数を 5、6 人に制限したほうがいいんじゃないかなと思いました。

❹自分もカリキュラムに設置されていること自体は、すごいいいことかなと思っていて。履修者全体で集まる授業みたいなときには授業と感じるんですけど、普段チームごとに行われる活動に関しては、授業という側面もありながら、どこか違うベクトルの活動という認識でもあったので、そこら辺は、今のところ受けてきた他の授業では、また授業かみたいな感じでマンネリ化じゃないですけど、ちょっとモチベーション低下しかけてたところに、そのプロジェクト演習という、授業だけとちょっとベクトルが違うというところで、「おっ」とスイッチが切り替わるという部分では、すごいカリキュラムに入っていることでも面白かったので、そこで強調じゃないですけど、もうちょっと売り出してもいいのかなというふうに、個人的には、授業らしくない授業ですごい面白かったなと思いました。

❺本当にできれば対面でやってもらったほうがいいのかなという気持ちがあって。一斉授業は受講人数が多いので、ちょっと難しいかもしれないですけど、でも最初の顔合わせとかは、できれば対面でできるように体制をつくっていただければいいのかな。

2-2. メンバーとの情報共有･意思疎通

履修学生は活動にあたって、対面・オンラインミーティング、SNS、メールなどの手段で情報共有・意思疎通を図っていた。「情報」というワードから以下のようなナラティブがあがってくる。ここから推察できるのは、学生の「対面」に対する積極的な評価である。対面によって話しやすい雰囲気が醸成されたり、ミーティング外の対面での話し合いが、結果的に情報共有や意思疎通に対して順機能的役割を果たしていたことが窺われる。オンラインは用件についてのみ議論するには便利であるが、グループ活動のようにメンバーの信頼関係が授業の基盤となるような授業形態ではオンラインだけでなく「対面」での活動が必要不可欠であることが改めて明らかになった。

❶やっぱり対面で何回か会って、もっとチーム内の交流というか、話しやすい雰囲気をつくるというのが情報共有の点でも大事かなと思いました。

❷メンバーとの情報伝達、意思疎通はメインが LINE だったかなと思っていて、あとは週に 1 回ミーティングしていたから、直接話しての情報伝達のほうが多かったかなというのは思うので、特に困ることはなかったかなと思います。ただ、メールがめちゃくちゃ来ていた時期は、どれがどれだっていうのは、すごく困った印象です。

❸メンバーとの情報伝達、意思疎通とかは、自分は結構今となれば、すごい仲良くなれたなって思います。最初はやっぱりお互いに緊張していたということもあったんですけど、連絡する機会が増えたり、週 1 のミーティングもオンラインから対面になって、直接会う機会も増えたということもあって、たわいもないおしゃべりとか、ミーティングが終わった後もみんなで教室残ってしゃべってたりとか、そういう機会も増えて、ああ、いいチームだなと思った。

❹メンバーとの情報伝達や意思疎通、さっきも言ったんですけど、オンラインのときは、少しぎこちないかなというふうには自分も含めて思っていたんですけど、対面になって、週 1 とか週 2 とかでミーティングで会うようになってからは、気兼ねなくなんでも話せるようになったりとか、別にそんなにお互いがあんまり遠慮してとかじゃなくて、ちゃんと自分の意見を言えるようになってきたんじゃないかなというふうには思っています。LINE のグループとかでも、市役所さんのほうから、こういうのがあるからお願いしますみたいな感じでお願いされたときも、その日中とか、早く決めごととかも決まっていったと思うので、そういう部分に関しては、スピード感をもってコミュニケーションを取れたんじゃないかなというふうに思います。

3. 2021 年度授業評価からの知見

2020 年度の質問紙調査ではオンラインの利点として以下の項目が挙げられていた。

表２　活動が対面ベースからリモートベースとなったことで生じたメリット（複数回答）

項目	実数	比率
リモートとなることで、活動時間の融通がきくようになった	35	89.7
メンバー間でのコミュニケーションが取りやすかった	5	12.8
課題提案者、外部協力者とのコミュニケーションが獲りやすかった	6	15.4
担当教員とのコミュニケーションが獲りやすかった	0	12.8
議論が深まりやすかった	4	0.0
学内での各種作業が進めやすかった	4	10.3
フィールドワークが実施しやすかった	0	0.0
資料などがアップロードされることで、自己学習が深まった	16	41.0
その他	0	0.0

出所：3)

もっとも大きなメリットはリモートとなることで時間の融通がきくようになったことと資料などがアップロードされることで、自己学習が深まったことの２点であった。しかし、今回のインタビュー調査からはこのような利点への言及はなかった。前述したように、このことは、リモート授業への「適応」「慣れ」の結果、当初感じられていたメリットが所与となり、取り立てて利点と感じられなくなったことに起因していると考えることができる。

また、昨年発見された「不要の要」すなわち「親密性の高まりが議論の深まり、ひいてはプロジェクトの成功とプロジェクトを通じた学修成果に大きく寄与していたということ」[4] は、本稿 2-2 で述べたように 2021 年度も再確認された。2021 年度の調査では、プロジェクト活動におけるミーティング以外のアルバイトや私生活の話題を学生は「コミュニケーションの深さ」と表現していた。授業だけの表面的なコミュニケーションを超えて私的な領域に関係が進化したときにメンバー間のインティメートな関係や信頼が生まれ、それが PBL 型授業における主体性や責任感、チームワークとつながり、結果として授業の達成感や満足感が押し上げられるということである。その意味で当然ながら対面活動は PBL 型授業において決定的な役割を果たす。また、対面授業において醸成された相互の信頼関係はリモートのコミュニケーションにおいてもプラスに機能するであろう。

コロナ禍における PBL 型授業はフィールドへ頻繁に足を運ぶことや対面授業の一定の制限を前提としなければならない。コロナ禍以前のような「密な」対面授業はもはや叶わないことのだとすれば、対面授業の効果を最大限に発揮できるような仕組みを授業のどの時期にどのようなかたちで組み込むかが授業成功の要諦となる。オンラインでは代替できない対面授業の長所が今回も浮き彫りになった。しかしながら、このことは PBL 型授業において対面がオンラインに対して絶対的に有利

であると主張したいわけではない。コロナ禍時代の授業においてオンラインの導入は不可避であり、それをことさらに避ける理由はない。対面とオンラインをどのように使い分けながら、最大限の授業効果をどのように得るのか、事前の綿密な授業設計と授業実施中の絶えざる効果検証作業がこれまで以上に必要とされると考えられる。

（岩佐淳一）

おわりに

2021 年度は 2 度の行動制限の発令により、合計 4 ヶ月間、学外実習ができないという大きな制約下で授業を行うことになったが、「履修学生全員を対象とした質問紙調査」ならびに「グループインタビュー」からは、履修学生のほぼ全員が授業を肯定的にとらえたことが分かり、彼らの満足度は前年の 20 年度と変わらなかった。

大半の学生は学習目標の達成感を得て、コミュニケーション欲求が満たされていた。また学修成果の観点からは、履修生たちがチーム活動を通して①失敗・困難という経験から学び、②協働体験から得るものがあり、③メンバー内で割り振られた役職を通して責任感と自主性・主体性が醸成されたこと。また④大学外の社会と関係づけられることから学び、⑤興味・研究分野や将来とのつながりを発見し、⑥会議や渉外の力量が形成され、⑦議事録・活動記録によるパソコン技術やメモ取りなど技術の習得も進んだことが浮き彫りとなった。いずれも社会人基礎力と密接に係わる事項であり、プロジェクト演習という授業の目標が十分に達成されていた。

他方、オンラインによるコミュニケーションの限界も再認識された。メンバー相互が信頼関係を築くためには、対面での活動がやはり必要不可欠なのである。より大きな教育成果を上げるため、オンライン授業と対面授業とをどのように使い分けるべきか、今後の課題と言えよう。

（神田大吾）

注

1)鈴木敦・岩佐淳一・神田大吾「コロナ禍における地域連携 PBL 授業 ── 人文社会科学部「プロジェクト演習」の対応と学生の評価 ──」『茨城大学教育実践研究』 40（2021）, 213.

2)田中輝美『関係人口の社会学−人口減少時代の地域再生』(大阪大学出版会, 2021).

3)鈴木敦・岩佐淳一・神田大吾前掲書,221.

4)鈴木・岩佐・神田前掲書,226.